

いては、映画音楽との関連から、本論 7 章においてあらためて触れる [7-3-4]。

6-4. コープランドの政治思想：その位置づけ

6-4-1. ヘンリー・ウォーレス：その民主主義とロシアに対する認識

第 8 章以降での分析に先立ち、ここまですを踏まえて、第 1 章 [1-2-6] で一度保留していたコープランドの政治的立場についてまとめたい。ここでもし、端的に政党名などを用いて、それを真に適切に示すことが可能であったならば明快であっただろう。とはいえ、ここまでの論の流れに従えば、まずはここで、共産党の名はあげられねばならない。この枠組みでいえば、彼は、非共産党員の共産主義信奉者、つまり「同伴者」‘fellow traveler’ として通常は認識されている。これについてマーチソンは、コープランドが正式な党員ではなかったことと、当時のアメリカ共産党の入党資格では同性愛者がその範囲外であったこととの関連にも考察の余地ありと指摘する¹³⁴。ここには、本来は、真正なる共産党的な共産主義者であったかもしれない可能性も疑うべきという含意があるが、しかし、かつてコープランドが、共産党の背信たる〈独ソ不可侵条約〉以降も、その基盤たるソ連〔ロシア〕という国自体への心情を維持し得たことから、党の政治組織主張内容の理論的合理性、それのみを信奉していた立場とは考えにくい。ここで、やおらソ連〔ロシア〕という国家と、共産党という政党とを区別して捉える視点が想起されてくる。

たとえば、以下のようなコープランドの認識構造が考えられるのではないだろうか。つまり、通常ならば、まずは共産主義思想が存在し、それが共産党を組織して革命をもたらし、ソ連や中国という国家の誕生に到ると考えるだろう。このとき、ソ連は共産主義なる概念の一部分にすぎない。これは〈世界革命論〉に照らし合わせるならば、まっとうな解釈であろう。この認識構造から、特殊〔ソ連〕を一般〔共産主義〕に含ませる文の基本構造にそって、「ソ連ならば共産主義である」という命題を立てるこ

とができる。かくして、その〈対偶〉から、共産主義〔及び共産党〕が否定的であれば、かならず、ソ連も否定的でなければならなくなる。この場合、共産主義に対する認識は、つねにソ連に対するそれと一体である。

一方、コープランドのうちには、ソ連〔ロシア〕という国家こそが、共産主義思想を信奉するとの認識の構造もまた、有効に作用していたのではないだろうか。このとき、共産主義はソ連〔ロシア〕なる概念の一部分にすぎない。この認識構造からは、「共産主義ならばソ連〔ロシア〕である」という命題を立てることができる。かくして、この見地においては、その論理的な〈裏〉により、部分としての共産主義〔及び共産党〕が否定的であっても、共産主義を全体の一部とするソ連〔ロシア〕の全体が、つねに否定的であるとは言えないことになる。ここでコープランドの実際に視線をうつすと、ポラックによれば、〈モスクワ裁判〉、〈プラウダ批判〉をはじめ、〈独ソ不可侵条約〉などの経過を辿ることで、次第に共産党に対して「皮肉な相がみられるようになった」のだが〔6-3-4〕、しかし、ソ連に対する好意的な心情はその後も維持されたといえる痕跡を、われわれは、すでにいくつか指摘した。したがって、帰納的な道行きから、上記命題、すなわち「共産主義ならばソ連〔ロシア〕である」との認識があったとの仮説を導くことも可能である。この命題を換言すれば、ソ連時代に実際に存在した、あのソ連の共産主義とは、ソ連〔ロシア〕という固有のイデオロギーを特徴づけるその一部という認識である。はたして、このような認識を、実際のコープランドは、本当に持っていたのだろうか。

コープランドと同時代に、これと同様の認識を公言している人物が存在し、あまつさえ、その人物の思想にコープランドは共感を示している。前述のとおり、それが、FDR 政権時の第 33 代副大統領ヘンリー・ウォーレスであることは論を俟たない〔6-3-5〕。トルーマンと対立を強めるウォーレスの政治思想の要諦は、そもそもの「民主主義」の追究におかれ、それを阻むもの、それこそとの対立に彼の政治的主眼が置かれていた¹³⁵。

ウォーレスが思う「民主主義」とは、彼において、その根底で「神の父性」と一致する。すなわち、彼によると、「民主主義」とはキリスト教的観念の政治的表明であった¹³⁶。「人間の友愛、神の父性、個人の神聖、これらこそが民主主義の、したがってアメリカニズムの、すなわち、現代プロGRESSIVISMの核心」〔ウォーレス〕¹³⁷という彼の観念論的政治理論は、したがって、それと対照的な共産主義思想とは、本来的に相容れない。それは、共産主義が、その唯物論において神を否定し、弁証法において科学的発展とともに止揚する歴史が前提となり、そこから生産様式が交替する見通しを得るという理論的根拠を基軸とするからである。以下の言及は、その親ソ政策からあるいは連想されやすい、ウォ

ーレスの容共のイメージとは相当の隔たりがあろう。なお、傍点は本論の筆者が付加した。

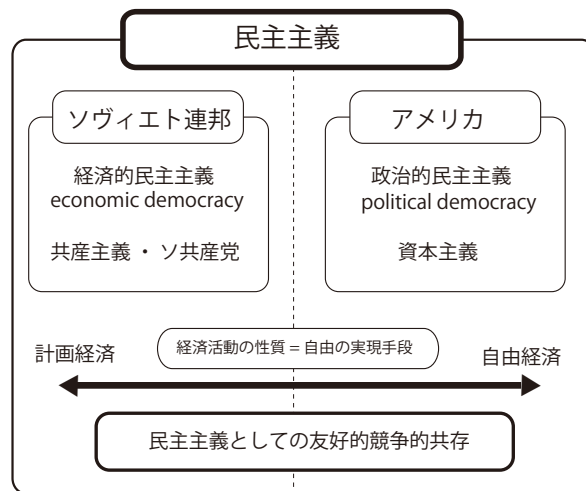
私がロシア共産主義に反対するのは、主に、それが弁証法的唯物論を宇宙の完全な説明として強調するからだ。私はその代わりに神をおく¹³⁸ [ウォーレス]。

なお、世論の支持に支えられ、1944年のFDR政権末期には、次期大統領の本命とも目されていたウォーレスが、リーダーとして資質において党内で警戒されたのが、この彼の率直なる理想主義や宗教的神秘主義への傾きにおいてであった。

さて、ここでわれわれが論じようとしているのは、けっして彼のこの宗教的側面ではなく、彼の共産主義に対する認識である。付言して、けっしてコープランドのウォーレスへの共感の淵源を、何か共通の宗教的信仰にみるとの論を以降で展開するものではない。そうではなくて、上記からは、皮相には親ソヴィエトや容共で知られたウォーレスではあるが、しかし、その内実では、共産主義思想に対して、それを絶対視せず、相対視していたことが確認されるべきである。端的に、共産主義思想それ自体の価値判断については、ウォーレスは、それをよしとはしないが、トルーマンとは異なり、けっして、悪とみなしてその存在を否定はしない。それは、上記の引用部のとおり、共産主義への「反対」とともに、対ソ協調との両方向の主張が共存することに示される。コープランドがウォーレスと共有する政治意識が表れてくるのは、この相対視された素地においてである。ここからは、ウォーレスの対ソ協調路線の主張を導くにいたる視座が、共産主義及び共産党それ自体におかれたものではなかったことが明らかとなる。

その視座は、すなわち、「民主主義」という、米ソを超越した審級に置かれていた。それは、図6-3.に示すように、いわば、「民主主義」を内包とし、アメリカとソ連が外延となる構造となる。かかる構造は以下のウォーレスの言葉に明らかである〔下線は筆者〕。

米ソとも、いわゆる後進国が世界の通常的生活水準を享受できるようにしたいと望んでいる。いわゆる後進国の目には、ソ連は万人に教育と仕事を保証する経済的民主主義の象徴と映り、アメリカは世界における政治的民主主義の偉大な指導者と映っている〔ウォーレス〕¹³⁹。



■ 図 6-3. ウォーレスにおける民主主義の概念図

ウォーレスの言葉を辿るならば、アメリカもソ連も、「民主主義」の追究において同水準のものであり、両体制間の相違は、ウォーレスのいう「経済的」と「政治的」をめぐる諸相ということになる。

このような「民主主義」の構造を前提として、さらに、それを真に「民主主義」的とする理念から考察するならば、実際にウォーレスがそう判断したように、米ソ双方の存在を等しく認めるのが本筋となる。また、「民主主義」の審級こそを信奉するならば、自ら、その構造を戦争において崩壊させるのは理に適わぬ行為となる。すなわち、アメリカがソ連を敵対視する根拠もなければ、まして財力と軍備によってそれを封じ込める道理は見いだせないことになる。

しかしながら、ここでソ連共産主義こそを恐れるべきとする立場が、民主党反共リベラル右派の意志実現を企図するトルーマン政権であった。共産主義の本望が、〈世界革命論〉にして〈暴力革命論〉にあることから、その覇権的なる「国際的性格」を警戒し、「全体主義の強制の阻止」すべきことを論拠とするのが対ソ強硬路線であった。その世界認識の構造においては、ウォーレスとはことなり、当然ながら共産主義は「民主主義」の外延たりえない。共産主義は「民主主義」の審級から外れて他者となり、

善なるアメリカ「民主主義」と、悪なるソ連全体主義との善悪観念を帯びた敵対関係が措定され、正義のうちに対ソ強硬の必然を謳い、共産主義に対抗する勢力であれば、世界中どこへでもアメリカの軍事力と財力を提供するとする〈トルーマン・ドクトリン〉〔1947年3月〕の構えがあらわれる。それでは、対するウォーレスは、なぜ〈世界革命論〉を恐れなかったのだろうか。

ウォーレスは、スターリンによるソ連外交の内実を見きわめ、通説の「国際的性格」に反し、むしろ、「ナショナルな、孤立主義的性格」と見抜いていた¹⁴⁰。彼は、ロシアの歴史をつぶさに検討し、それが千年以上にわたり多民族からの侵入に抵抗してきたことに基づく防御的性格に最大の特徴を見いだしていた。この性格は革命後のソ連でも外交上の基本要因として存続し、スターリン時代に到り、より民族主義的傾向が強まったと彼は考えた。ウォーレスは以下のように、ソ連共産党のその特異なる性格を見きわめて指摘する。

スターリン時代には、新しいナショナリズムが共産主義に代わって主導的な力になった。文盲一掃、生産増強などますます内部を志向するようになった〔ウォーレス〕¹⁴¹。

ソ連の行動の大部分は、経済上のさし迫った必要と安全保障上の不安、つまり資本主義国に包囲されるのではないかという恐れからくる〔ウォーレス〕¹⁴²。

ソ連を封じ込め孤立させればさせる程、ソ連は一層友好国によって国家を守ろうとする〔ウォーレス〕¹⁴³。

ソ連にとって友好国とは、社会主義政権を意味するのではなく、ソ連に敵対せずに協力する意志のある政府をさす〔ウォーレス〕¹⁴⁴。

ソ連に対して、このように認識するウォーレスにとって、もし、トルーマン政権が恐れるような共産主義国家による侵略行為とみえる事態があったとしても、その内実とならば自国の安全を守るためのロシア的行動様式なのであり、共産主義的行動様式ゆえではないとの認識をもっていたのである¹⁴⁵。すなわち、アメリカが敵対する構えをみせるなら、その防御的性格ゆえ、ソ連もまた強硬になるが、しかし、アメリカが刺激しないかぎり、ソ連が自ら覇権的性格をみせることはなく、もっぱら国内再建につとめるのみであろうと考えたのである。さらには、もし、アメリカの対ソ外交の目的が協調にあると知れば、ソ連は、必ずアメリカに協力するだろうと推測したのであった。したがって、このいわば、特殊ロシア的民族主義的共産主義に担保されることで、共産主義国家ソ連の国際的覇権的性格が否定されるとともに、革新的なる「経済的民主主義」の探究と見なしうるソ連を、アメリカとおなじ「民主主義」の外延に位置づけた。かくして、「民主主義」の名のもとには、ソ連と敵対する理由は見いだせず、FDRの外交基調を継承し、協調こそ肝要とする外交路線、つまり、米ソ協調路線がウォーレスのうちに主張されることになるのである



■ 図6-4. 第二次世界大戦末期、FDRとともに微笑むスターリン。テヘラン会議にて。FDRはこの会談時にスターリンを「ジョーおじさん」と親しみをこめて呼んだ。1943年撮影。（Library of Congress, LC control number: 98519681）。

このようなウォーレスの認識におけるソ連と共産主義の関係は、冒頭に仮説したコーブランドの認識モデルと同種である。つまり、両者ともソ連の共産主義は、その本来的理論に反し、実際は民族主義的

性格を帯びたものであり、ソ連〔ロシア〕という固有のイデオロギーを特徴づける一部とする認識である。ただし、ウォーレスやコーブランドにおける、このロシア観が、現実のロシアに照らし合わせて、どれほどの的を射たものかは、今回のわれわれの議論の目的や範疇ではない。われわれは、彼らの関連を示すことで十分であろう。

ここでの目的はコーブランドの政治思想の輪郭を示すことである。そして、ここまでを整理するならば、コーブランドには、ある特殊なるロシアに対する認識の存在を、われわれは仮説したが、ウォーレスにおいては実際にそのような認識が存在するということである。ここから、コーブランドに仮説された認識について、その存在の蓋然性を高めるには、たとえば、ウォーレスの政治思想への共感が示されるべきだろう。ただし、まさにこのウォーレスのロシア観の部分に共感したことを示す、痕跡とならば、それは、今回は見いだせなかった。しかし、まずは違う側面ではそれが指摘できるものである。

コーブランドにおけるウォーレスの「庶民の世紀」〔century for the common man〕の理念への共感は、クライストが指摘したとおり、コーブランドが命名したタイトル《庶民のためのファンファーレ》〔以下《庶民のための～》〕に刻まれたことで明らかである〔6-3-5〕。この曲が、1942年8月30日、シンシナティ交響楽団の指揮者ユージン・グーセンスによって、連合国の戦意高揚のためのものとして委嘱されたものであり、その際、タイトル名を「～のためのファンファーレ」の形とした上で、その献呈部分は作曲者に委ねられるものであったことは既に述べた。

ところで、このグーセンスの委嘱は、コーブランドの他にも、18人ほどの作曲家に委嘱されたものであった。その際、グーセンスは、あらかじめタイトル案を例示しており、それはたとえば、「兵士のためのファンファーレ」、「空軍兵のための～」などであった。したがって、作曲家らは、ここから大凡の求められている命名の要領や範囲は了解できたはずである。そして、この指揮者の意図を汲んで、ある者は《アメリカ兵のためのファンファーレ》とし、またある者は《医療隊の～》、そして《奇襲部隊の～》、《落下傘兵の～》といった曲が続々作曲されていった¹⁴⁶。そして、ウォルター・ピストンならば《闘うフランス人のためのファンファーレ》、ヴァージル・トムソンは《フランスのための～》、ヘンリー・カウエルが《我が南アメリカ同盟軍のための～》などとしたように、そのタイトルは、それぞれの観点が垣間見えるものとなった。たとえば、当時のフランスはナチス占領下に置かれた時期に相当し、それにとまなう、ピストンやトムソンの思いがあらわれている。

コーブランドは題名を決定する過程でいくつか案を提案した¹⁴⁷。それらには「民主主義精神への～」（to the Spirit of Democracy）のほか、「リディツェの再生のための～」（for the Rebirth of Lidice）

がみられる。この「リディツェ」とは、現在のチェコにかつてあった、悲劇のうちに消失した村であり、1942年6月、ナチスによって全住民が虐殺または強制収容所に送られた上、村全体が更地にもされた惨劇の地である。留意すべきは、コーブランドのこの社会的動向に対する関心の強さと情報の新鮮さである。その他、クライストが「不格好」と指摘する長いものでは、「より良き世界を提案することに専心した人間精神の厳粛なる儀式のためのファンファーレ」や、「より良き世界の創造にむかう人間精神に捧げるファンファーレ」などといった案があった。これらから一目瞭然であるが、明らかにゲーセンスの意図の範囲を超え、本来は戦意高揚のための委嘱にも拘らず、コーブランドというフィルターを通すならば、そのすべてが、社会改革に向かう人間精神へこそ視点が向けられていることである。これは、戦後には自他ともに隠し、そして隠された、このコーブランドという藝術家の、本来的社会的性格が図らずも現れた事例といえるだろう。合わせてまた、ドイツの所業を批判するとともに、なによりも、結局は、アメリカが戦争へむかう側面をすべて無視している点を、それを主張として読み取れよう。序章でのべたように、今日、この曲は、アメリカ海兵隊のリクルートでしられるが〔0-1〕、作曲の経緯を遡ると、そこから想像しやすい、露骨な戦意高揚及び右派的愛国主義のような意図は存在しないのである。

このような、コーブランドの社会に対する目線の運びから、タイトル《庶民のための～》は選択された。それまでの素案を含め、すべての題目が革新的、「民主主義」的、平和的である。結果としてタイトルは《庶民のための～》となった。この曲名がウォーレスの演説題目「自由世界の勝利の対価：庶民の世紀」（CBS ラジオ演説、1942年5月8日）から引いたものであることは、すでに述べたとおりである〔6-3-5〕。

ここでわれわれが着目すべきは、コーブランドがこの曲のタイトルを思案する過程で、けっして、《ソヴィエトのためのファンファーレ》や、《労働者のための～》の種のもので、存在しないことである。また、挙げられた素案にはこれが現れそうな兆しや含みもない。ピストンやトムソンにみる連合国への目線の運びや、当時の米国保守の親ソ気運、コーブランドの親ソヴィエトの心情、そして映画『北極星』の制作や立案に近い時期であったことを考量すると、このようなタイトルが、当時の彼のうちに連想されてくる可能性を疑うのも無稽ではないはずである。むしろ、それが存在したとしても後年に資料から削除されたのかもしれないが、仮にそうであったとしても、結果として現れた題目が、ソヴィエトや共産主義をさらに包摂する次元を示唆するものとなったことは変わらない。

ここから、コーブランドのうちにもまた、先に検討したあのウォーレスと同じような、アメリカとソ連を「民主主義」のうちに包摂する認識モデルがあったことが示されてくる。それは、先に図でしめ

したものであり、特殊ロシア民族主義的共産主義を包摂するソ連〔ロシア〕を、さらに上位から丸ごと包摂するものである。アメリカとは経済体制が異なるが、「民主主義」のオルタナティブな政体としての認識である。そして、「庶民」〔common man〕というその象徴的なキーワードをもって、コーブランドのまなざしの先が、あまねく信奉される「民主主義」のなかでも、ほかならぬウォーレスのそれであることが明らかである。ウォーレスの「民主主義」をパラフレーズするならば、「庶民」を主役とする「庶民の世紀」となる。そして、第3章で検討した歴史家オリヴェエ・ザンズが述べるとおり、ウォーレスが示唆するこの「庶民」とは、われわれが第3章で検討した「平均的アメリカ人」にはかならない〔3・3-4〕。

ヘンリー・ウォーレス副大統領は1940年代にもまだ『庶民の人』(common man)について述べているが、それはジャクソン時代〔19世紀〕の市民を心に描いていたのではなく、戦間期に社会学者によって行なわれた何百という調査や研究から生まれた抽象的な『平均的』中流階級のアメリカ人を思い描いていた¹⁴⁸。

したがって、移民国家アメリカにおいてこそ不可欠であった「庶民 = 平均的アメリカ人」の概念に基礎付けられたこの「民主主義」とは、まさに、〈革新主義〉にもとづく「民主主義」にはかならない。コーブランドはウォーレスにおいて、かかる意味での「民主主義」をみて、それに共感したのである。

6-4-2. コーブランドの政治思想：その位置づけ

本論が結論するコーブランドの政治的立場は以下である。その基調は、もとよりその血におけるリトアニアの記憶と幼少時のロシア的環境を機縁とする、彼のうちのロシア文化への静かで特別な思いを土壌とし、その基盤の上に、ウォーレスにおける〈革新主義〉的なる「民主主義」に近いそれを信奉する立場であった。コーブランドは、その幼少期に19世紀的なる中西部の農村的なアメリカの文化的趣向に惹かれた形跡はほぼみいだせない。反面、幼きころよりロシア文化の精神を深層で内面化する彼にとっては、観念的な共産主義思想より先に、経験から得たロシア文化に対し、ほぼ素朴なる美的感興において親近感を見いだしていた。それだけに、そのロシアが歴史的に挑戦する革新的社会改革への動向には、格別な興味と期待感をもっていただけられる。このような基盤の上に、アメリカ〈革新主

義) 期 [1900 から 1920 ごろ] の気運のもとに根付いた彼のうちの革新的志向と、また、パリ遊学後、ニューヨークに地歩を固めた 1924 年以降、「サークル」の先達の著名なる文化人たちが発する社会改革的気運に影響をうけ、そのころ「ソヴィエト連邦」と名をかえたかの国が推進する共産主義思想にも関心をもった。かかる思想については、もともと、パリ出発前のゴールドマーク門下での修行時代、1920 年ごろに〈フィンランド社会主義同盟〉催事場でピアノ演奏のアルバイトをしている頃に出会ってそれに興味をもち、その後、この思想の具体的内実を知ったのは、のちの 1930 年頃に、親戚で共産党員の演劇家ハロルド・クラーマンの読書を経由してのことであり、したがって、その程度の理解ともいえる。他方、コープランドには、ときに感情的とまで言いうるほどの反ドイツ感情があることを、われわれは指摘せねばならず¹⁴⁹、その文脈からも、彼は、反ファシズムの急先鋒たるソ連共産党やコミンテルンに寄り添う立場を固めていった。コープランドは、その深層において静かな愛着をもつロシアにみるその革新的動向への期待と、反ナチスの構えのほかならぬ中枢であることにおいて、組織としての共産党が彼の行動範囲に入ることとなったのである。

しかし、コープランドは党派的共産主義者ではない。たしかに、彼は 1930 年代に〈作曲家集団〉などの党関連団体や出版物にも関与した。一方、それは、彼において、より内包的な理念への追究にともない、結果的に現れた外延的な事象とするのが、われわれが、ここでもっとも強調すべき点となる。ここでの、より内包的で高次なる理想こそが、「民主主義」にはかならない。ウォーレスにみるソ連的な「経済的民主主義」とアメリカ的な「政治的民主主義」とが、より高次の概念、つまり、「民主主義」において包括される構造である。これに基づけば、互いに、手段のちがう「民主主義」の実現への試みにして、彼は米ソを対立的に捉える理由を見い出せなかったであろう。ここまでいくどか触れたように、冷戦期を経て、コープランドは自らの政治的言及を隠蔽し、資料からもそれは読み取れない。したがって、コープランドの政治的側面は、ここでウォーレスを参照するように、コープランドの外部から辿るより方法がない。そこから、両者の関連性が示されねばならなくなる。ただし、これについては、すでに、ウォーレスに対するコープランドの共感や、コープランドが共産主義以上に信奉する理念が存在したこと、それが《庶民のための〜》の命名の過程をもって明らかであった。

この作曲家が米ソ対立を不要と考える理由は、また、別の側面にも基づいていた。つまり、コープランドのロシア文化への理解の深さである。彼は、おそらくウォーレスの見解とは別の経過を辿り、つまり、およそ 20 年代の早い時期から、彼独自において、のちにウォーレスが示したような、あのロシア外交特有の性格を直観していたのではなかっただろうか。すなわち ——ここでもウォーレスを援用

せねばならないが——、ソ連が、本来の「国際的性格」というよりも、どこかでロシア時代からの歴史文化的性格を反映するような、防衛的で孤立主義的性格をもち、その外交は、外部から刺激をしないかぎり、覇権的性格は少なく、平時には、意外にも、素朴な心情において、自国存続を維持する範囲での国益の追究をもっぱらとしていることである。そして、このような性格はロシアの特有の歴史的背景から生まれるものであり、共産主義の台頭もまた、そのうちの一つとするものである。ここからは、したがって、アメリカにおいてソ連共産主義の脅威を主張する根拠を失うことになる。折しもスターリンは〈一国社会主義〉という特殊な政体を謳ったものであった。そしてまた、かの認識からは、共産主義がソ連〔ロシア〕というイデオロギーを固有に特徴づける一部と考えることができ、その意味で、特殊ソ連的なる共産主義思想の相対視が可能となる。たとえば、一部分が悪くとも、必ずしも全体が悪いとは言えないが、われわれは、コープランドのうちに、このような認識の構造があり、かつ、ロシアへの愛着があったからこそ、彼は、〈独ソ不可侵条約〉以降も、ソ連〔ロシア〕への思いを維持できたと考えるものである。〈独ソ不可侵条約〉や〈プラウダ批判〉は、ソ連〔ロシア〕の根本にかかわるものではなく、その一部を構成する特殊ロシア的な共産主義が、さらにスターリンによって誇張して現れた一時的な問題と彼は考えたのではなかっただろうか。

コープランドは、革新的な民主主義を追求するという彼の大目的に基づきつつ、その小目的において共産主義運動に関与した。ここで音楽家としての彼において、その「小目的」への関与の目的をまとめるならば、それは、音楽家としては、なによりも、「庶民=平均的アメリカ人」への「共同体の音楽」の展開と発展においてである。つまり、それは、革新的にしてアメリカらしい、そのような新たな音楽において、音楽と生活が新たに有機的に結び付く「中間地帯」を創出することの挑戦であった。このような社会的藝術活動の彼のモデルとなったのが、ハンス・アイスラーやベルトルト・ブレヒトであった。一方、音楽家の立場に限らず、より敷衍した見地から彼の共産主義への関与における希求をのべるならば、彼は、〈革新主義〉がもたらした「庶民=平均的アメリカ人」におけるアメリカの〈大衆消費社会〉を、まず大前提として捉え、その社会によってもたらされた〈消費の民主化〉、つまり、アメリカの「民主主義」の一形態を、よりよい形に発展させることであったと考えられる。つまり、現状のアメリカ資本主義の体制維持を大前提とし、けっして、それを暴力革命によって転覆し、社会主義経済としての、いわば「ソヴィエト=アメリカ」とすべしという思惑はなく、そうではなくて、さらなる〈革新主義〉的見地から、いまだ改革の余地多い資本主義を、ソ連的「経済的民主主義」の観点から部分的に改革し、より理想的なるアメリカを実現することにあつたと考えられる。

彼は「民主主義」追究における小目的として共産主義を信奉した。その文脈でいえば、党派的な存在ではないが、彼は共産主義者である。一方、コープランドは、アメリカにおいて社会主義暴力革命を望むものではなく、アメリカ社会にみる更なる改善点を、社会主義的な観点から部分的に改革すべしと考える立場であった。その文脈としての彼は、共産主義者にあらず、いわば、アメリカの〈リベラル〉というべき存在である。すなわち、共産主義者か否かという問いは、彼において的を射ないものとなる。

政治言動が隠されたコープランドにおいて、今日、1930年～40年頃のコープランドの政治信条を代弁するのは、ヘンリー・ウォーレスであり、それは「庶民の世紀」や対ソ協調路線に示される「民主主義」と要約できよう。一方、「民主主義」を信奉することは皆共通のことゆえ、さらにウォーレスの中に目を転ずると、この副大統領の「民主主義」の根源たる「庶民=平均的アメリカ人」という中産階級を創出したアメリカの〈革新主義〉に考えが行き着く。それはもともと、多様性、無秩序、そして格差のみの「19世紀アメリカ」のなかに、あらたな共同体としての、まさに「アメリカ人」をつくり、そこから〈大衆消費社会〉による〈消費の民主化〉というアメリカ独自の「民主主義」をもたらした淵源である。アメリカの〈革新主義〉は、アメリカに、法律的ならぬ実際の「民主主義」をもたらしたといえよう。ウォーレスの「庶民」という語に象徴されたアメリカの「民主主義」にコープランドは共感した。その意味で、彼の信奉する政治的立場は、〈革新主義〉というのが適当である。

したがって、われわれが本節冒頭で触れた、端的なる政党名での示唆を試みるならば、それは、1948年にウォーレスが結党した「革新党」というに相応しい。今日、アメリカ史学では〈進歩党〉と定訳されるこの政党ではあるが、それは、セオドア・ルーズベルトの先行する同名の政党との混乱を避けるための便宜的措置にすぎない。その名、“Progressive Party”は、まさに〈革新主義〉の精神をもつウォーレスにおいて結党されたものであった。したがって、これを文化史的観点から、その内実を的確に示すことを企図し、ここで文字通りの「革新党」と訳出したとしても、その結成年を併記する限り、大きな問題とはならないと考える。